

一八八四年七月三日(木)

バララーム家の礼拝室において、ブナール・ヤートラ 帰山車祭の日に信者たちと共に

タクルル、聖ラーマクリシュナと万教大調和

タクルル、聖ラーマクリシュナは、バララーム家の応接間で、信者たちの集まりのなかに坐っておられる。いかにも嬉しそうなお姿！ 信者たちを相手に話していらつしやる。

今日はブナール・ヤートラ(訳註) (帰山車祭)。木曜日。アシャル月白分十日目。一八八四年七月三日。バララーム氏の家で大聖ジャガンナートの供養があり、祭り用の小さい山車だしも用意されてある。彼は祭りにこよせて、タクルルをお招きしたのであった。その小さな山車は、二階の屋外ベランダに引いてゆくことになっている。去る六月二十五日の水曜日、ラタ・ヤートラ(訳註) (山車祭)の日に、タクルルはイシヤン・ムコパツダエ氏のターンタニヤの邸を訪問されていた。その日の午後、カレッツジ街のブーダル家に滞在している学者シャシャダルと始めて対面なさった。そして五日後の去る月曜日に、シャシャダルドフネキヤシヨルは南神村のカーリー寺院にタクルルを訪ねて、二度目の会見をしたのであった。

タクルルのお言いつけで、バララームは今日、シャシャダルを招待していた。この学者はヒンドウー

教の解説をして人びとを教導している。それで聖ラーマクリシュナは、彼により力をつけてやるために、熱心になっておられるのだろうか？

タクールは信者たちと話をしておられる。そばにラーム、校長、バララーム、マノモハン、数人の青年信者たち、バララームの父親などが坐っている。バララームの父親は非常に堅固なヴィシヌ派の信者である。彼は殆どの時を聖プリンダーヴァンにある別荘で一人で暮らし、大聖シャーマスンダラ（クリシュナ）の神像に仕えているのだった。プリンダーヴァンで常時神に仕え、時には聖チャイタニヤ行伝などの信仰書を読んだり、また時々それを書写したり、また時には自分の首にかける花輪を編んだりして日を送っているのだ。同じヴィシヌ派の信者を招いて接待することもある。バララームは父をタクールに会わせようとして、何度も何度も手紙を出してカルカッタに呼びよせたのである。「どの宗教にも宗派根性というのがある。特にヴィシヌ派はそれが強い。いたずらに他宗の教義に

（訳註1）ブナール・ヤートラ、ラタ・ヤートラ―インド四大聖地の一つであるオリッサ州プリーのジャガンナート寺院で、アシヤル月（6月中旬〜7月中旬）白分二日目から九日間にわたって行われる祭。寺院に安置されているジャガンナート（世界の主）の意でヴィシヌ神＝クリシュナのこと、バララーマ（クリシュナの兄、スバドラー（クリシュナの妹）の像を三台の山車に乗せて二キロ程離れたグンディチャ寺院まで信者が引いて行く祭で、悪王カンサを滅ぼしたクリシュナが、兄バララーマと妹スバドラーと共に山車に乗って帰還したことに由来する。祭の最終日にはジャガンナート寺院に帰るために山車を引いて来た道に戻って行く。行きをラタ・ヤートラ、帰りをブナール・ヤートラと言う。京都の祇園祭の原型とも言われている。

反対するばかりで、理解しあつて仲よくすることを知らない——このことをタクールはいつも信者たちに言いきかせている。

〔バララムの父親に対する万教調和についての教訓——バクタ・マラー、シユリーマッド・バーガヴァター——以前の話し——マトウールのところでのヴァイシユナヴァ・チャランの狂信とシャクテイ派の悪口〕

聖ラーマクリシユナ「(バララムの父親はじめ信者たちに向かつて) ヴイシユヌ派の書物に、『バクタ・マラー』というのがあるが、いい本だよ——いろいろな信者の信仰生活のことが書いてあつてね。でも、ちよつと片寄つている。大実母にヴィシユヌ派の眞言を受けさせるようなことが書いてあるのさ! (訳註、バクタ・マラー——「信者の花輪」の意味で、多くの信者の話が載っている十六世紀の書物)

以前わたしは、ヴァイシユナヴァ・チャランをさんざほめ上げて、シエジヨ旦那(マトウール氏)のところへ連れていった。旦那はえらく丁重にもてなしてくれたよ。銀の皿やコップを出したりしてね。そのあとであの人は、シエジヨ旦那の面前で言うに事欠いて——『我々のケーシヤブ(クリシユナ)・マントラを受持しなくては、どうにもなりませんよ!』と言つたんだよ。シエジヨ旦那はシャクテイ派で、大実母を礼拝しているんだ。顔を真っ赤にして席を立つた。わたしや、彼をつつついてやったよ! シユリーマッド・バーガヴァター——あれにも、こんなことが書いてある。ケーシヤブの眞言を授かりもせずして煩惱の大海を渡らんとするは、あたかも小犬の尾をつかんで大洋を渡るが如し。』と。どの宗派の人も自分たちの教義を大げさに考えているもんだね!

シヤクテイ派の連中も、ヴィシユヌ派を目的のカタキにしてけなす。ヴィシユヌ派が、『クリシユヌだけが我々を煩惱の河の向こう岸に渡してくださる船頭だ』と主張すれば、シヤクテイ派はこう言う。『そりゃもつとよ。我々の大実母は宇宙の女帝であられる。何で、おん自ら渡し舟なんぞをお漕ぎになるものか。そのクリシユヌという男を船頭にお雇いになったのさ』(一同大笑)

〔以前の話——タクールの生誕地訪問(原典註)(二八八〇年)——フルイ・シャームバザールのヴィシユヌ信徒の織工たちの自慢——調和の教訓

「誰も彼も自分たちの教義ばかり自慢している！ 郷里くの方のシャームバザールのあたりに機織職人はたおりが大勢いる。たいていヴィシユヌ派の信者だが、それがまた、えらそうなことを言っているんだよ。『この人は、どのヴィシユヌを信じていなさるのかね？ ナニ、保護者としてのヴィシユヌ！ じゃあ、おれたちはこの人には触れない！』どのシヴァだつて？ 『おれたちはアートマ・ラーマー——アートマ・ラーメーシユワラのシヴァを信じている』とか、また誰かは、『どんなハリを信じているのか、おれたちに教えてもらいたいね』なんて——糸を紡つむぎながら、こんなえらそうなことを連中はしゃべって

(原典註) 聖ラーマクリシユナが最後に生誕の地を訪れたのは西暦一八八〇年で、フルイ・シャームバザールにフリタイと共に行かれた。ナタヴァル・ゴスワミー、イシヤン・マリツク、シャダイ・ババジたちと共に称名キールタンをされた。

いるのさ！」

〔ロティの母親の頑固さ——ロティの母親、カーティヤーニーの侍女〕

「ロティの母親はラーニ・カーティヤーニーの侍女だが、ヴァイシユナヴァ・チャランと同じ宗派でね、頑固なヴィシユヌ信者だ。

此処にずいぶんしげしげとやって来ていた。誰にも負けない信心ぶりだ！ ところがある日、わたしが大実母カーリーのお下がりをお腹に食べているのを見て、とたんに逃げ出して二度と来なくなつたよ！ 調和できる——他人の考えを理解して認められる人間こそ真の人間だ。だが、たいいていの人は偏つた考えをもっている。わたしは何を見ても——みんな一つだよ。シャクティ派、ヴィシユヌ派、ヴェーダーンタ派、それぞれの考え方は皆、その同じ一つのものを含んでいるんだよ。無性無相の實在である御方が、同時に形をもつていなさるんだ。いろいろさまざま相になつて現れていなさるのが、その無性無相の御方なんだよ。

相無く、性無き わが父

いろいろに形なす わが母

此を讀え 彼を責むるも 益なし

天秤の 重さは同じ 両の皿

ヴェーダに書いてあるあの御方のことは、タントラにも、プラーナにも出ています。同じ一つのサッチダーナンド(サット・チット・アトンド)（実在・智慧・歓喜—ブラフマンの実体）のことなんだよ。永遠である御方が変化活動(リドラ)なさるんだ。ヴェーダでは、オーム・サッチダーナンド・ブラフマンと呼んでいる。タントラでは、オーム・サッチダーナンド・シヴァ——シヴァは純粹なり——純粹にして一なるシヴァ。プラーナでは、オーム・サッチダーナンド・クリシュナと呼ぶ。一つのサッチダーナンドのことが、ヴェーダにも、タントラにも、プラーナにも書いてあるんだよ。それにヴィシヌ派の經典にも、クリシュナこそがカーリー(パラマハンサ)になっておられると書いてある」

タクール、聖ラーマクリシュナの**大覚の境地**——**幼児の如く**——**狂える如く**

タクールはベランダの方へちよつと行かれて、また部屋に戻ってこられた。外へ行かれるときに、ヴィシユヴァンパール氏の娘がタクールにノモシカルをした。六、七才位の子である。タクールが部屋に戻ってこられてから、女の子はタクールとお話した。いっしょに一人、二人、同じ年頃の子供たちが来ている。（訳註、ノモシカル——頭を下げてのあいさつ、ヒンディー語でナマスカール）

ヴィシユヴァンパールの娘（タクールに向かつて）「あたし、あんたにノモシカルしたのに、こっちは見なかったわ」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハ、そうかい。気がつかなかったよ」

娘「じゃあ待つて。もいちどノモシカルするから。待つてよ、こつちのアンヨにもするから！」
 タクールは笑いながらお坐りになり、床に額までつけて女の子にお辞儀を返された。そして女の子に、「歌をうたつてごらん」とおっしゃった。女の子は言った。——「神さまに誓つて、あたしは歌をうたえないの！」

どうしても歌つておくれ、とタクールがお頼みになると、「神さまに誓つて」と言ったのに、それでも歌えつていうの？」タクールは楽しそうに女の子たちの相手をなさり、ご自分で歌つてお聞かせになった。最初はふざけた歌。その次に、「さあさ、おいでよ、髪結つてあげよ、ご亭主びっくり、ほめてくれる！」(子供たちも信者たちも聞いて笑つていた)

〔以前の話し——生誕地訪問(東京註)(一八六九〜七〇)——子供のシヴァラームの行状——シオルのフリダ
 イの家でのドウルガー供養祭——タクールの法悦に狂気時代のリンガブージャ

聖ラーマクリシュナ(信者たちに) 大覚者(パラマハンサ)は、全く五つの子供そっくりの性質だ。あらゆるものが靈意識(チャクラ)に満たされて見える。

わたしが郷里(カマールブクル)にいたとき、ラームラルの弟(シヴァラー)は四つか五つだった。池の端(はた)でキリギリスをつかまえようとしていてね、木の葉が動くと、音をたてないようにと木の葉に向かつてこう言うんだ——『黙つて！』ボク、キリギリスをつかまえるんだから！』ひどい大嵐のとき、わたしといっしょに部屋の中(うち)にいた。稲妻がピカピカと走つていて、それでも戸をあけて外に出た

がる。叱つたら外には出なかつたが、時々ぞいてみては、稲妻が走るとこ言う——『叔父さん！
またあそこでマツチをすつてるよ！』

大覚者は子供みたいだよ。身内と他人の区別もないし、世間のことに何の執着もない。ラームラルの弟がいつかわたしに聞いたよ。——『あんたは、チャチャ(叔父さん)なの、それともフファ(叔母さん)のダンナさんなの？』と。

大覚者は子供みたいに、自分の居る場所、行く場所、どこでもおかまいなし——。あらゆるところにブラフマンが充ち満ちて見えるんだから——。どこへ行こうが来ようが全くおかまいなし——。ラームラルの弟がフリダイの家にドゥルガー祭りを見に行つた。いつの間にか、フリダイの家から抜け出してどこかへ行つてしまつた！ 四つばかりの子を見た通りすがりの人が、『坊や、どこから来たの？』と聞いた。なんにも答えられない。ただ『コヤ』というだけ(外に八つの仮小屋を建ててそこで祭祀が行われる)。今度は『誰のおうちから来たの？』と聞くと、『オニイチャン』と言うだけ。

それから、大覚者は気狂いのような様子になることもある。わたしがそんな頃は、シヴァリングダと言つて、自分のリングガ(陰莖)をさかんに拜んでいたものさ。生身(いき)リングガ崇拜だ。真珠玉をひとつ飾つ

(原典註2) ラームラルの弟シヴァラーム氏はベンガル暦一七二二年チエイトロ月十八日、ドルブルニマールの日(西暦一八六六年三月三十日)に生まれた。タクルが生誕地をお訪ねになったとき、三、四才だった。即ち、西暦一八六九年〜七〇年のころ。

たりして！今はそんなこと出来ないがね」

〔寺院建立の直後（一八五五年）、狂人の如きブラフマン智者と会う〕

「南ドフキネンシヨル神ツ寺院が建立されて何日か後、一人の気狂いがやってきた。それが完全智者フルナルナジニユニヤニニ（ブラフマン智者

体得した人）だった。破れたサンダル、片手に竹の小枝、もう一方の手に鉢植えのマンゴーの若木。ガ
ンガーに浸つかかかって出てもお勤行ツトメ一つするでない。衣の端につつんである何か得体の知れないものを食
べる。それからカーリー殿に入つて讚詞スタヴをあげはじめた。お寺全体が震えたよ！そのときハラダリ
がカーリー殿にいた。接待所の奴らはこの人に飯をやらないのに、そんなこと気にもとめない。みん
なが捨てた皿代わりの木の葉から、残りの飯粒を拾つて食べていた——犬どもといっしょになつて。
時々、犬どもを押しつけては自分で食べていたが、犬も別に怒つて吠えもしない。ハラダリが後をつ
けていつて恐る恐る聞いてみた——『あんたはどういう人ですか！もしや、完全智者フルナルナジニユニヤニニでは？』すると
その人は、『おれは完全智者フルナルナジニユニヤニニだよ！黙つていなさい（皆に言うな）！』ハラダリからそのことを聞いた
とき、わたしは胸がドキドキしてきて、思わずそばにいたフリダイにしがみついてしまったよ。そ
して大実母マに言った——『マー、じゃ、わたしもあんなふうになるんだらうか！』それで、わたしら
はその人に会いに行つた。わたしらに對してはすばらしい智慧の言葉を話したが、ほかの人が来ると
気狂いのように振舞つた。ここから出て行くとき、ハラダリはいつまでも後についていった。門を出
ると、その人はハラダリにこう言った——『あんたに、まだ何を言つたらいいんだね。この水溜まり

の水と、ガンジス河の水とをまったく区別しないようになったら、完全智を得たと思っていよいよ」そうして、足早にスタスタと行ってしまった」(訳註——この完全智者は、^{フレイシジニヤニ}、^クバマケバ、という名の聖者)

博学だけでなく行が必要

タクール、聖ラーマクリシユナは校長と話をしておられる。信者たちがそばに坐っている。

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて) シヤシヤダルのことを、お前、どう思うね?」

校長「はあ、立派な人だと思えます」

聖ラーマクリシユナ「とても賢い人だね、え?」

校長「はい、ずいぶん博学でございますね」

聖ラーマクリシユナ「ギターによると、大勢の人から尊敬されたりほめられたりする人の内部には、神の力が在る。でもあの人には、まだするべきことが二、三、残っているよ」

校長「はあ——」

聖ラーマクリシユナ「博学だけじゃどうにもならない。何か行^{サレダナ}をすることが必要だ」

〔以前の話し——ガウリー・パンディットとナラヤン・シヤーストリの修行——ベルガリヤの別荘で——ケーシヤブと会ったこと(一八七六)——キャプテンの来訪(一八七五〜七六)——〕

ガウリー・パンディットは修行をした人だ。いつも『ハー、レ、レ、ニラランバ、ランボダラ!』と

言つて大実母への讃詞を上げていたが、そのときは、ほかの学者どもはミミズぐらいにしか見えなかつたもんさ。

ナラヤン・シャーストリーもただの学者じゃない。大いに修行をした人だ。

ナラヤン・シャーストリーは二十五年間ぶつ通しに勉強しつづけた。ニヤーヤ(六派哲学のひとつ、正理派)を七年も研究した。それでも、ハラ、ハラ(シヴァの別名)と称えながら法悦境に入つたものだよ。ジャイプールの王様が宮廷付きの学者にしようとしたんだがね、彼は承諾しなかつた。南神村トクネノムラによく来て泊まつていたものだよ。ヴァシシュタ・アーシユラマにとでも行きたがつて——そこで苦行をするつもりだった。行く、行くと何度も言つていたつけ。わたしがそこへ行くのを止めたんだよ。そうしたらこう言つた。『人間、いつ死ぬかわからないのですから、修行しなけりゃ——。いつダメになるかわからないんですよ!』さんざ言い合ひをした挙げ句、わたしはとうとう「行け」と言つた。(訳註、ヴァシシュタ・アーシユラマ——リシケシ近郊にある聖仙リシヴァシシュタを祀つた僧院アールシヨウ)

人のうわさによると、ナラヤン・シャーストリーは肉体を捨てたと言ふ。苦行しているときにバイラヴァに叩かれたんだ、とも聞く。また、こんなことを言う人もある——あの人は生きている、汽車に乗っているのを見た、と。(訳註、バイラヴァ——「恐ろしい者」と言う意味でシヴァ神の別名)

ケーシャブ・センに会う前に、わたしはナラヤン・シャーストリーにこう言つた。——『お前、いちど行つて、どんな人だか会つてみてくれ』と。会つて来て、『あの人は称名ジヤバの達人ですよ』と教えてくれた。彼は占星術を知つていて——『ケーシャブ・センは良い運命です。わたしがサンストラッ

トで話したら、あの人はベンガル語で話しましたよ」

それでわたしは、フリダイを連れて、ベルゴル(ベルガリヤ)の別荘に行つて会つたんだよ。会うや否やわたしはこう言つた——『このお人だけシッポがとれている。このお人は、水の中にも陸の上にも住めなさる』と。

(ケーシャブは)私を試すために、ブラフマ協会の会員を三人カーリー殿によこした。そのなかにブラサンナもいたんだよ。夜昼わたしを眺めていて、ケーシャブのところへ戻つて報告するつもりだったんだね。わたしの部屋のなかに夜までいた。——『ダヤーマイー、ダヤーマイー』とばかり言つていたつけ。——そしてわたしにこう言うんだ。『あんた、ケーシャブ様におすがりしなさい。あんたのためになりますよ』つて。わたしは、『わたしや、形のある神様を信じているんだよ!』と言つてやつた。それでも、『ダヤーマイー、ダヤーマイー』とやっている! そのとき、言うに言われぬ気分になつて、『ここから出ていってくれ!』と怒鳴つた。どうしても部屋のなかに居させなかつた! 連中はペランダに出て寝たよ。(訳註) ダヤーマイー——大慈大悲の意。ブラフマ協会では神のことをこう呼んでいた。ペ

(訳註2) ガウリー・バンディット——名前をガウリー・カーンタ・タルカプーシヤンと言う。一八六四年頃に、聖ラーマクリシュナは神の化身^{アヴァタタラ}のかを確かめるために数人の人物が呼ばれたが、そのうちの一人がタントラ派の修行者^{サドガカ}であったガウリー・バンディットである。彼は招かれると、ハ、レ、レ、ニランバ、ランボダラ、ジャナニ、カム、ヤム、シヤラナン(無力な我は、ガネーシヤの母なる汝を除いて、誰に帰依せん)と大声で唱えるのが常だった。彼は、タクル、聖ラーマクリシュナを神そのものであると宣言した。

ンガル語ではドヤモイ)

キャプテン(ヴィシユワナート・ウバッタエ)も、最初わたしに会った日には泊まっていったよ」

〔マイケル・マドウスーダン、ナラヤン・シャーストリーと語る〕
(原典註3)

「ナラヤン・シャーストリーがここにいたとき、マイケルが来た。マトウール旦那の長男のドワリカさんが連れてきたんだ。隣接する火薬庫の英国人を訴えるために頼まれたんだよ。それでマイケルを連れてきて、旦那方はいろいろ相談したわけだ。

寺の事務所に広間がある。そこでマイケルに会ったよ。わたしはナラヤン・シャーストリーに、何か話をするようにと言った。マイケルはサンスクリットをあまりうまく話せなかった——間違ったりして！それからベンガル語にした。それでナラヤン・シャーストリーが、『あんたは、どういうわけでわが祖先伝来の宗教を捨てたんですか?』と聞くと、マイケルは自分の腹のあたりを見て、『胃袋のためにね——捨てたんですよ』

ナラヤン・シャーストリーが言った——『胃袋のために宗教を捨てるような人とは、何の話もしたくないですね!』するとマイケルがわたしに向かって、『あなたはどうお思いですか、おっしゃって下さい』

わたしはこう言ったよ。『どうしてだかわからないが、わたしは何も言う気がしない。誰かが口をおさえているようでね』

〔女と金は学者にとつても知性を低くさせるもの——俗人の祭祀〕

チョウドリー氏がタクールに会いに来るといふ話があった。

マノモハン「チョウドリーは来ないでしょう。あの人はこう言つてました。——『ハリドプールのあのベンガル人（ジャシャタルのこと）がそこへ行くんだらう？ だから行きたくない！』と」

聖ラーマクリシュナ「くだらないことを！ 学問を鼻にかけて、おまけに再婚までして、この世をただの泥んこだと思つている！」

チョウドリーはM・A（マスター・オブ・アーツ。ここではカルカッタ大学の修士号）をとつている。最初の妻が亡くなると、著しい離欲の傾向をみせていた。そして、南神寺ドフケネーシヨルのタクールの許もとによく通つてきていたが、やがて再婚したのである。月三、四百タカの給料を得ている。

聖ラーマクリシュナ（信者たちに）この女と金カネに対する執着が、人間をくだらなくさせるんだよ。ハラモーハンがはじめて来た頃はとてもいい特徴をもつていてね、わたしは会いたくて焦れ焦れしたものだ。あの頃、十七か、十八だったらう。そのうち、いくら使いをやつて呼んでもパツタリ来なくなつてしまった。今は家族と離れて嫁さんといっしょに暮らしている。前には母方の伯父さんの家に

（原典註3）マドゥススターダン（1824～1873）はサガールダリ生まれの詩人。一八六二～一八六七年の間イギリスに暮らして、キリスト教に改宗していた。タクールに会つたのは一八六八年以降であらう。一八七三年死去。

いて、とてもよかつたのにね——世間的な煩^{わづら}いが何もなく。いまは別に住んでいて、嫁さんのために毎日市場^{バザール}通いだ(一同笑う)。いつかあすこ(南^{ドミ}神^キ寺^{シユル})へ来たので、わたしは言ったよ。——『行ってくれ、ここから出て行ってくれ。お前に触^{さわ}ったら、私の体はどうなることか——』と。

カルタバジャ派のチャンドラ・チャトジーが来ていた。六〇から六十五才くらいの年令の人である。彼はカルタバジャ派の讃^{りやう}詞^じを、とても流暢^{りゅうちやう}に朗誦^{ろうじゆ}する。タクールは笑いながら——「おや、今日はいつになく丁寧^{ていねい}に話すね」とおっしゃったので信者たちも笑い出した。タクールの御足に触^{さわ}て拜^{まが}むつもりで来たのだが、タクールは御足に触^{さわ}らせて下さらなかつた。

やがて、タクールはバララーム家の祭神、大聖ジャガンナートを拜^{まが}むため奥の部屋に行かれた。奥の部屋では、婦人の信者たちがタクールにお会いしたくて待ちかねているのである。

タクールは再び応接間にいらっしゃった。ニコニコしておられる。「用を足した時に服を着替えて、それからジャガンナートにお参りに行って、花をすこしお供えしてきたよ」とおっしゃった。

聖ラーマクリシュナ「俗っぽい連中は、ときどき思い出したように称名やお祈りや修行のまねごとをする。至聖^{かみ}以外のものを知らない人たちは、一息^{いそぎ}ごとにあの御方の名を念じている。絶え間なくラーマのことを想^{おも}って、オーム、ラーマと称^{なづ}えている人もある。智識の道を行じている人たちさえ、ソーム(我はソ、レなり)をくりかえしている。年中舌を動かして神の名を称^{なづ}えている人もある。

いつも神を思い出しては、神のことを想^{おも}っていることが必要なんだよ」

バララームの家にて、シャシャダルおよび信者たち——タクルの三昧

シャシャダル氏が、一、二名の友人と部屋に入ってきて、タクルにあいさつしてから坐った。

聖ラーマクリシユナ「ハツハツハツハツ。わたしらは皆、花嫁の寢床のそばで花婚のご到着を待っている仲間みただった——いつ花婚が来るかと思って！」（訳註——皆で花婚を迎える風習がある）

学者シャシャダルは笑った。信者たちは部屋いっぱい集まってきた。バララームの父上も出席している。医者のプラタプ先生も来ている。タクルはまたお話しになった。

聖ラーマクリシユナ「（シャシャダルに向かって）智慧のしるしは、先ず、性質や態度がいつも平安であること。第二に、高慢なところが少しもないこと。あんたはこの二つとも具えているね。

智者には、この他にもいくらか特徴がある。サードゥのところにいるときは世捨て人の如く——仕事をすると、つまり講演をしているようなときはライオンの如く——。妻のそばではおどけ者の如く——。そして、まことに味わい深い学者だ」（学者およびその他の信者たちすべて大いに笑う）

「ヴィジュニヤーニ覚者の様子は、また別だよ。チャイタニヤ様のような境地だ。子供のようで、気狂いのようで、無生物のようで、食屍鬼のようだ。子供の気分でいるときは、まったく無邪気だ。少年の気分のときは遊びに夢中だ。だが教えるときは、青年のようにはつらつと力に満ちている」

学者シャシャダル「どのような信仰によって、あの御方をつかむことができるのでしょうか？」

〔シャシャダルと信仰の原理に関する話——燃えるような信念が必要——ヴィシユヌス派信者の謙遜〕
 聖ラーマクリシユナ「生まれつきの性質によつて、信仰にも三種類あるんだよ！ 信仰のサットヴァ、信仰のラジヤス、信仰のタマス。

信仰のサットヴァ——これは神様だけがご存知だ。この種の信者は信仰を隠しておくことが好きなんだ。蚊帳かやのなかで瞑想したりするから、誰も気がつかない。サットヴァのサットヴァ——清められたサットヴァ。この信仰を持つようになれば、神を見るのもそう遠くない。東の空が明るくなれば、太陽が昇るのが間近だということがわかる。

信仰のラジヤスを持つている人たちは、自分が信仰していることを他人に見せたいという気がある。その人は十六の道具を揃えて礼拝供養をするし、絹の衣装を着こんで寺詣りに行く。首にはジユズ菩提樹ドラーウクシャの数珠マールをかけて、しかもその数珠の首飾りには、とところどころに真珠や金の玉をはめ込んでいるんだ。

信仰のタマス——盗賊おいはまのような信仰だ。棒を振り回して強盗して歩く。警察の手下が八人来てもビクともしないで、『殺せ！ 木こつ端役人め！』などと叫んでいる。気狂いのように、『ハラ、ハラ、ハラ、ヴォム、ヴォム、ジャイ、カーリー！』と唱えている。大へんな精神力と燃えるような信念だ！
 (訳註、ハラ——シヴァの別名、ヴォム——シヴァの信者が神に呼びかける言葉)

シャクティ派の信者は、こういうような信じ方だ——『なに？ 一度カーリーとドウルガーの名を称よえたんだ！ 一度ラーマの名を称よえたんだ！ 今さら、私に罪などある筈がない！』

ヴィシユヌ派の人たちは、それはそれはへり下った態度だよ。ただ数珠を繰っては、（バララームの父親を見やりながら）哀れっぽい声で称えている。「おお、クリシユナ様よ。どうぞお慈悲を——。私は賤しいものでございます。私は罪深い人間でございます！」

「あの御方の名を称えたんだから、もう私には罪なんか関係ない！——この燃えるような信念が欲しいものだねえ！ 夜も昼もハリの名前を称えているくせに、私は罪人だなんて！」

話しておられるうちに、タクルルは神の愛にうっとり酔ったようになられ、歌をおうたいになる——

ドウルガー ドウルガーと御名よびて

われ もしこの世を去るならば

いとあさましき身なれども

ついに神をば知るならん

めうし 牝牛や僧を手にかけて

はらこ 胎児を殺し 酒に酔い

かよわき女を傷つけて

重ねし罪も わがころ

1884年7月3日(木)

つかの間さえも気にならず
大実母の御足に ただすがるなり

この歌を聞いて、学者シャシャダルは泣いていた。
タクルルはまた、おうたいになる――

歓喜よろこびに われを忘れて――

永遠に絶えることなく

シヴァと踊りたわむれ

甘露酒うまざけをかたむけ

ゆらりゆらりとしなだれても

倒れはしない――大実母よ！

今度は、アダルの歌手であるヴァイシユナヴァ・チャランが歌う――

ドウルガーの名を常にとなえよ

聖なるドウルガーのほかに
我を救うものは無し
.....

大実母よ、あなたは天国

あなたは地上、あなたは冥府(地下の国)
ハリ、ブラフマー、十二のゴパーラも

すべてはあなたの手よりなる

十変相も、十化身も、すべてあなたなり

この度はどんな相でも構わない

かならず我を救い給え

動くもの、動かぬものもあなた

粗きもの、細かきものもあなた

創り、保ち、滅ぼすもあなた

大宇宙の根元なるあなた

あなた、三界のおん母よ

あなた、三界の救い主よ

すべての力はあなたなり

十変相(ダシャ・マハーヴィディヤ) —
ドウルガーがとる十の姿

- ①カーリー ②ターラー ③トリプラスンダリー
(シヨダシー) ④ブヴァネーシユワリー
⑤チンナマスター ⑥バイラヴィー ⑦ドウマー
ヴァティー ⑧バガラムキー ⑨マータンギー
⑩カマラ

十化身(ダシャ・アヴァターラ) — ヴィシュ
ヌ神の十の化身

- ①魚(マツヤ) ②亀(クールマ) ③猪(ヴィラー
ハ) ④人獅子(ヌリシンハ) ⑤矮人(ヴァー
マナ) ⑥パラシユラーマ ⑦ラーマ ⑧クリシユ
ナ ⑨仏陀(ブツダ) ⑩カルキ

大実母よ、あなたの力もあなたなり

この終わりの数行をお聞きになると、タクールは半三昧状態になられた。歌が終わると、こんどはタクールがご自分でうたい出された。

ヤシヨーダーにクリシユナは、青い玉ニールマニと呼ばれて

やさしく踊ってみせたもの——

あの美しい姿をどこかに蔽かくして

このカーリーのすさまじきおん顔

ヤシヨーダーもクリシユナも大実母カーリーから、という意味の歌

すさまじきおん顔——カララヴァディニー、カーリー女神の別名

ヴァイシユナヴァ・チャランが、こんどはスポールとの出会いのキールタンを歌った。

歌い手が即興句を入れて——「ララの音なしには、ダダの音は出せない」と言ったとき、タクールは三昧に入られた。(訳註、スポール——聖クリシユナの遊び仲間だったスポール・ミランのこと。「ララの音なしには……」——この歌はラーダーを歌ったもので、ララ、ダダはラーダーを指す)

シヤシヤダルは聖きよらかな愛の涙にくれていた。

ブナール・ヤトブナール・ヤト
帰山車祭——山車の前でタクール信者たちと踊りキールタンを歌う

タクルの三味は解けた。歌も終わった。シャシャダル、プラタブ、ラームダヤール、ラーム、マノモハン、青年信者たち大勢が坐っている。聖ラーマクリシュナが校長におっしゃった。——「お前たち、誰かこの人を突つてみる」——つまり、シシャシャダルに何か質問しろととおっしゃるのである。

ラームダヤール「(シャシャダルに向かつて) 聖典には、シプラフマンの現象は想像によるとと出ておりますが、その想像は誰がするのでしようか？」

シャシャダル「プラフマン自らが想像するのです——人間一般の想像ではありませんよ」

プラタブ先生「何故ですか？ 何故、プラフマンが想像するのですか？」

聖ラーマクリシュナ「何故だつて？ あの御方は誰かと相談して仕事をなさるわけじゃないよ。ご自分の楽しみのためだ。あの御方はしたいことをなさるんだ！ 何故あの御方がなさるか、そんなこと調べていったい何になる？ マンゴーを食べるために庭に来ているんだから、マンゴーを食べろ。木が何本あるか、枝が何千本あるか、葉っぱが何万枚あるか、そんなこと勘定して何になる？ ムダなことを議論したり考えたりしていたら、本質をつかむことはできないよ」

プラタブ先生「じゃあ、もう何も考えてはいけないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「ムダな議論や考えをするな、というのさ。だが、実在と非実在について考えること——つまり、どれが永遠か、どれが一時的なものか考えることだ。情欲や怒りや、または悲しみに負けそうになったときに——」

シヤシヤダル「それは別です。それは識別にもとづく分別ウイチャールといわれております」

聖ラーマクリシユナ「うん、実在と非実在を分別ウイチャールすることだ」

一同、黙っている。

聖ラーマクリシユナ「前にはえらい人たちが来たものだよ」

シヤシヤダル「どんな金持ちですか？」

聖ラーマクリシユナ「いや、えらい学者たちだ」

一方、小さな山車が二階のベランダに持ち込まれていた。大聖ジャガンナート様デーヴァ(クリシユナ)、スバドラー(クリシユナの妹)、およびバララーマ(クリシユナの兄)の像が宝石その他の飾りや新しい黄色の衣装を着て、さまざまな色の花や花輪で美しく飾られて安置されている。バララームは純粹誠実な祀りをする人なので、派手なことは何もしない。外部の人たちは、この家で山車祭ラクヤートが行われていることさえ知らないのである。

やがてタクルは、信者たちといっしょに山車だしの前に行かれた。そのベランダで山車引きが行われるのである。タクルは、山車の綱を手を持ってしばらくの間お引きになり、その後で歌をおうたいになった。

ゆらゆら　ゆらゆら　河ナディアの上

ガウルの愛の波がたつ

チャイタニヤ(ガウランガ)の生誕地である
ナディア、と河(ナディア)をかけている

ハリの名呼んで涙を流す
あの二人の兄弟が来たよ

タクールは踊っていらつしやる。信者たちもタクールに合わせて踊り、かつ歌っている。キールタ歌手のヴァイシユナヴァ・チャランも、信者の一団の歌や踊りの仲間に入った。

見る見るうちに、ベランダは人でいっぱいになった。婦人たちまで、近くの部屋からこの愛の欲びを拝見している！まさにシュリーヴァースの家で、聖ガウランガが信者たちと共にハリの愛に酔いしれて踊っているかのようなであった。学者シャシャダルも、友人たちと山車の前でこの踊りと讃歌を拝見していた。

まだ日は暮れない。タクールは再び応接間に戻られて、信者たちと共にお坐りになった。

聖ラーマクリシュナ〔学者に向かつて〕これがバジャナナーナンダ（聖なるものを愛慕し礼拝する歓喜）というものだよ。世間の連中はヴィシャヤナーナンダ（世俗の歓喜）を追って暮らしている——つまり女と金の喜びだ。愛慕礼拝しているうちに、あの御方がお恵みによつて会つて下さるんだよ。そうなるよブラフマーナンダ（真理体得の歓喜）だ」

シヤシヤダルとその他の信者たちは、感動して言葉もなく傾聴している。

シヤシヤダル「(うやうやしい態度で) はい。して、どのようにしてお慕い申せば、この甘露したたる境地になれるのでございませうか?」

聖ラーマクリシユナ「神に会いたくて、魂が居ても立つてもいられなくなるような慕い方だ。グルが弟子に言った——『どんなふうにも熱心になれば神がつかめるか、教えてやるから従ついてこい』——そういつて池のところこゝに連れて行って、頭を水の中に押し込んだ。しばらくして、手を放してから弟子に聞いた——『お前の命はどんな具合になったかね?』弟子は答えた。『それはもう、死に物狂いでした』」

シヤシヤダル「そうそう、全くその通りでございます。今度はよくわかりました」

聖ラーマクリシユナ「神を大好きになること——これが肝心だよ! 信仰こそ肝心なんだ! ナーラダがラーマにおっしゃった——『あなたの蓮の御足に純粹な信仰が持てるように、あなたの世にも魅惑的な現象マヤに迷わないように』とね。ラーマはおっしゃった——『そのほかにもつと願望のぞみなさい』——』
ナーラダは答えた——『これ以上、何も要りません。ただ、蓮の御足に交まらぬ信仰を持ちつづけることができずように——』」

シヤシヤダルが帰ろうとした。タクールはこの人のために、馬車をいいつけるようにと、傍はたの者におっしゃった。

シヤシヤダル「結構でございます。私どもは歩いてまいりますから——」

聖ラーマクリシユナ「アハハハハ、とんでもない! プラフマーが瞑想ディヤナしても手が届かぬあなたに、

そんなこと——」(訳註——シヤシャダルほど偉大な御方にそんなことは出来ない、と言っておられる)

シヤシャダル「特にいま、お暇いとまする必要はないのですが、でも、夕べの勤行つとめをしなければなりませんので——」

〔聖ラーマクリシユナの大覚パラマハムサの境地と仕事の離脱——甘美な称名ナームキールタン〕

聖ラーマクリシユナ「大実母マが、わたしの勤行つとめを取り上げてしまいなすった。夕拝つとめのようなお勤行つとめによって体と心を清めるんだよ。今はもう、その境涯じやないのさじゃないのさ」

こうおっしゃって、タクルールは歌の一節をとりあげて口ずさまれた。

浄ツと不浄ツの二人の妻と

楽しい部屋に寝るのはいつか

張りあう二人が仲よくなれば

おんはは御母シヤーマが顔を出す！

学者シヤシャダルは、お別れのあいさつをして去って行った。

ラーム「私、きのうシヤシャダルのところへまいりました。あなた様がそうおっしゃったので——」
聖ラーマクリシユナ「あれ、そんなこと言いやしないよ。でも、そりゃよかったね——お前が行っ

たのは」

ラーム「新聞記者(インディアン・エンパイヤー紙)が一人、あなた様のことを非難しておりました」
 聖ラーマクリシュナ「どうってこともないさ」

ラーム「ところが、まあ、お聞き下さいまし！ 私の話を聞くと、もう私を離そうとしないのですよ——あなた様のことをもっと聞かせてくれと言つて！」

医者 of プラタプ先生はまだ坐っている。タクールはおつしやつた。——「あそこ(南神寺)に一度おいで。産婆のブヴァンが言つたよ——馬車賃は出すから——」

日が暮れた。タクールは宇宙(ジャガット・マター)の大実母(と)の名を称えておられる。ラーマの名、クリシュナの名、ハリタンの名を称えておられる。信者たちは静まり返つてそのお声を聞いている。何という甘美な称名(ナーム)キールタンだろう。まるで、蜜の雨が降っているようだ。今日のバララーム家は、まさにナバドウィープである。表はナバドウィープ、奥はプリンダーヴァンだ。(訳註、ナバドウィープ——チャイタニヤの生誕地で信者たちに取り囲まれてハリ称名をした場所)

今日は夜になつてから、タクールは南神村(トツキンシヨル)にお戻りになる予定である。バララームはタクールを奥の間にご案内した。飲み物を差し上げるのであろう。その機会に婦人信者たちは、もう一度この御方にお会いできる筈である。

一方、信者たちは表の応接間で、タクールをお待ちしながら声をそろえて称名(ナーム)キールタンをしている。やがてタクールは表に戻られて、皆といっしょにお声を合わされた。

キールタンはつづく――

わたしのガウルは踊ってる

シュリーヴァースの庭で 信者といっしょに

踊って キールタンうたってる

かがやく顔で ハリの名となえ

ゴラはガタダールをみつめてる

あけぼの
曙色のゴラの中から

愛の涙がほろほろ落ちて

黄金色の体をぬらしてる

タクールは即興句をつけられる――

踊って キールタンうたって

ほら、サチーの愛いとし子が踊ってる

ほら、私のゴラが踊ってる

ほら、命のゴラが踊ってる

ガウル、ゴラ――共にチャイタニヤの愛称

サチー――チャイタニヤの母親の名